

中世曹洞宗切紙の分類試論（十九）

——参話（宗旨・公案・口訣）關係を中心として（補）——

石川力山

六、五位説關係切紙

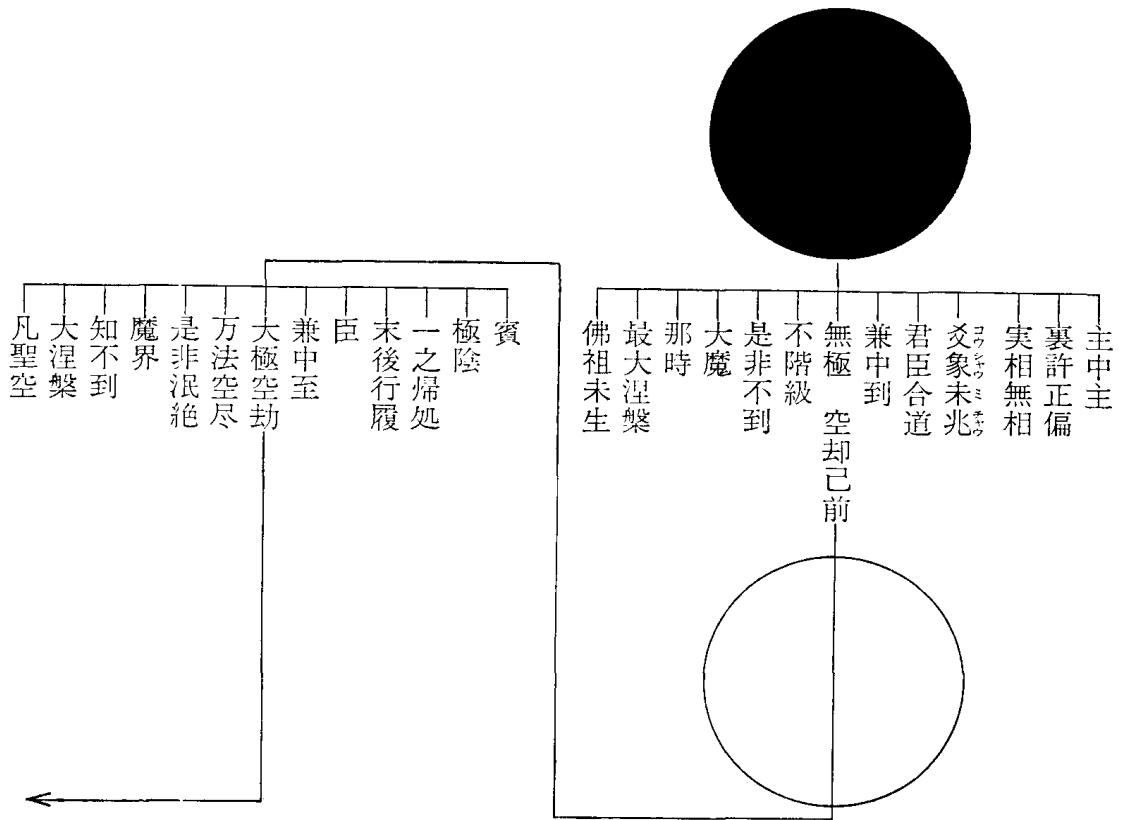
五位説とは、中国曹洞宗の祖洞山良价（八〇七～八六九）とその資曹山本寂（八四〇～九〇一）によって創唱され、曹洞の宗旨の特色を示す指標となる説として唱道された機関であり、日本曹洞宗では、道元の場合は少くとも形式的な意味で宗旨の根本とすることは厳しく破棄された⁽²⁰⁾。

中国禅宗で成立し、曹洞の宗旨を闡明する機関説として伝承された偏正五位説も、臨済下の諸流によって依用されることにより、その性格も修行の段階を重んずる功勳的な内容に変わっていったとされるが、⁽²¹⁾しかし宋代にいたるまで五位説は、特に宏智派などにおいて曹洞宗を特色付ける教義体系として伝えられてきた事実は見逃せない。

日本曹洞宗の場合でも、たとえば若き遍参修行時代の中岩円月（一二三〇～七五）や月堂宗規（一二八五～一五六一）などは、曹洞の宗旨を極めようとして、永平寺五世住持の義雲

（一二五三～一三三三）の下に参じているが、五位説を学んだという確証はないものの、『義雲録』に見られる義雲の『宏智録』依用の態度や、その五位説を継承した上堂語などに見られるように、臨済の宗風とは趣を異にする禅風であったことは疑いない⁽²²⁾。

その後、曹洞宗の歴史の上では、特に峨山韶碩（一二七五～一三六五）によって五位説は、道元派下の曹洞宗旨を敷衍する説として全面的に採用され挙揚されることになり、傑堂能勝（一三五五～一四二七）や南英謙宗（一三八七～一四六〇）の師資による本格的な研究参究がなされ、⁽²³⁾一方では、臨済宗の諸師によって改変されたとされる功勳的性格が、曹洞宗でも行われた看話禅・公案話頭を拈提する門参中心の禅風とも呼応して、中世曹洞宗の教学的根柢にもなっていた。したがって、これまで紹介してきた切紙類においても、その内容が宗旨として拈提される場合には、常に五位説が依用され、この範疇に則った解釈がなされており、切紙における五位説の内



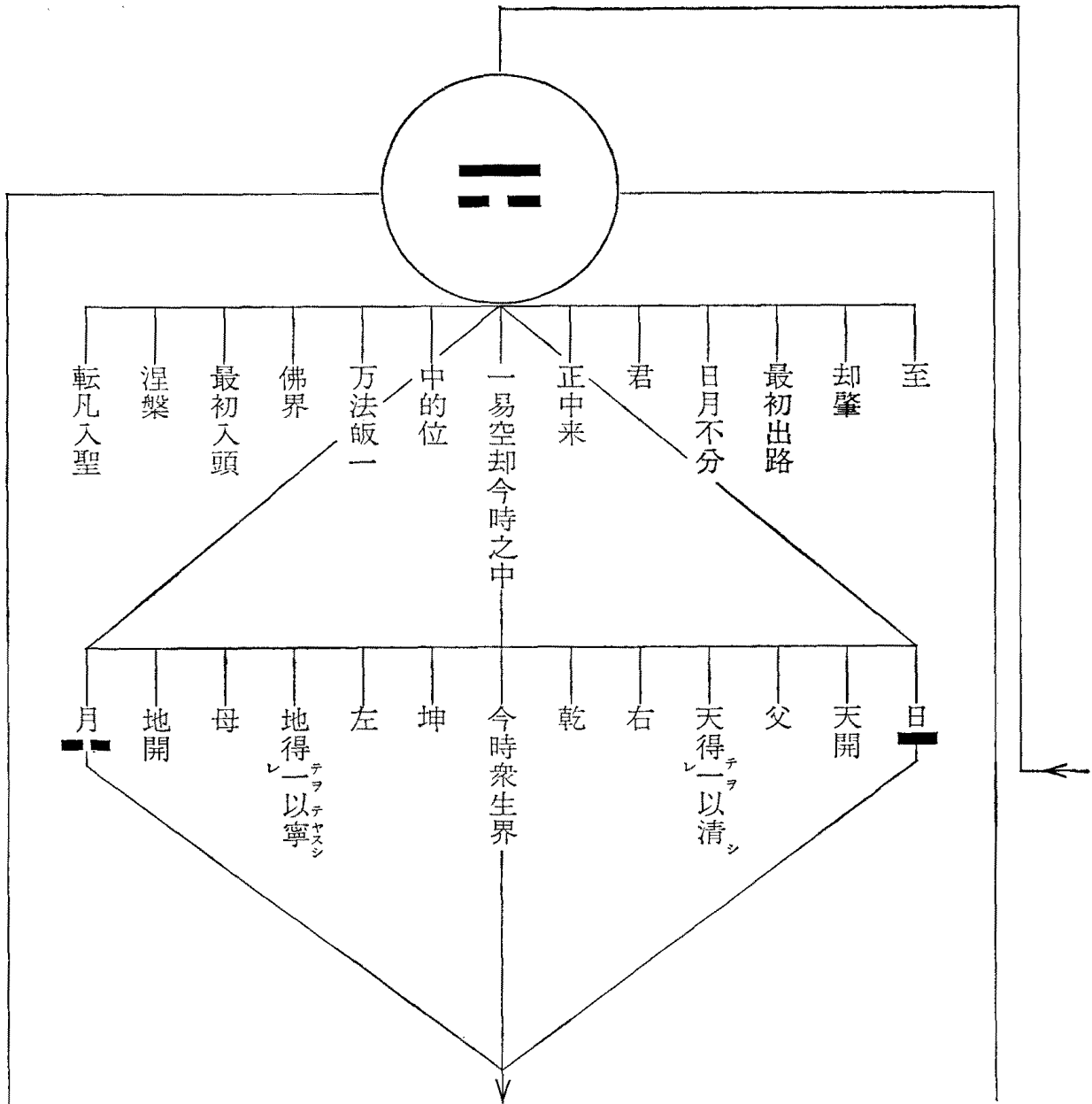
容についてはこれまでも数多くの用例があったので、それらをもう一度内容的に再検討して改めて五位説関係の切紙として再紹介すべきであるが、本稿は今の所、内容の検討よりは、切紙の全体像の把握とその分類を当面の課題としているので、ここでは直接に五位説そのものを宗旨の根幹と見なしている切紙に限って紹介することにする。

まず、五位説の創唱者とされる洞山良价の偏正五位説の根拠となる基本的な考え方を示す「洞山五位之図」を、小田原市香林寺所蔵、寛永十六年(一六五九)書写により、及び「洞山五位」を埼玉県正龍寺所蔵、元和三年(一六一七)書写の例で掲げておく。

(端裏)洞山五位之図 長円
洞山五位秘密

(図入)

師之諱者良价、会稽之人也、俗姓者俞氏、得法於洪州雲岩曇晟禪師、住錫州洞山、広智弘才究易道之深淵、故以易象之図、交會宗道而建立五位之圈、然雖如是、代及僥季、不弁其位次之至要、余為救取米情、具註破之、末代之宗門大秘書可



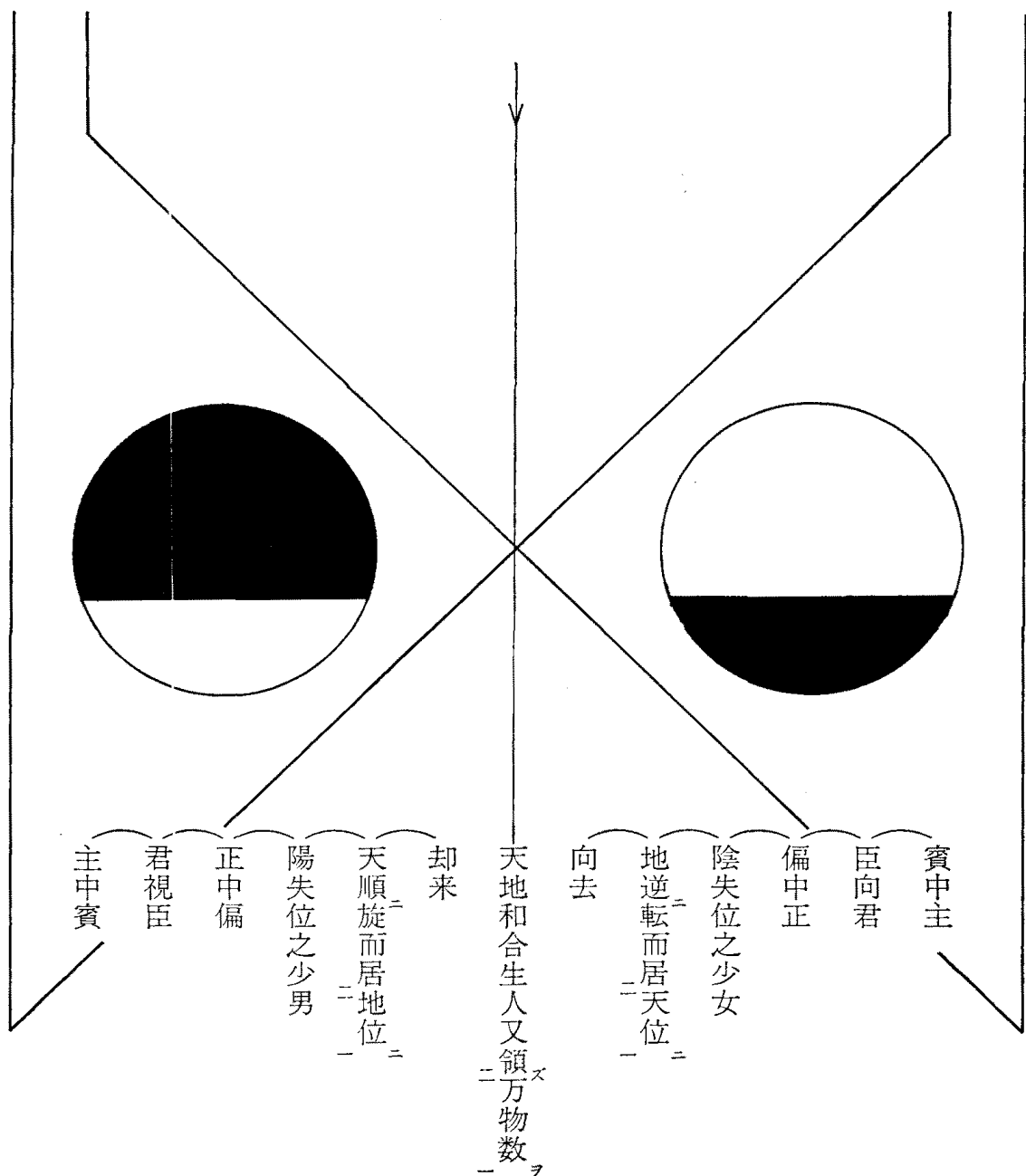
為者也。

天童如淨禪師日本永平道元和尚從嫡々相承來也。

●夫無極者、大極已前之劫故、絶極之思議、無始無終、無去無來、無心無念之一位也、但於此有空見与、聖見差、偏見無心無念者、是空見也、見以下無心為心、以無念為念者、是聖見也、以此無心之心無念之念、三世諸仏護持、是為頂相、歷代祖師傳授、是為命根也、以無極之象、号兼中到者、兼者無心之心与、無念之念、相兼之儀也、到者、這心念者自然之到也、以此心念之三名裏許之正偏君臣、已下之四位者外頭也、右案之、無極者是過去之劫肇、一易也、

○夫大極者自過去之劫肇、天地開闢而所生長之人、万物次第空去、廓々寥々之處也、是謂空劫、以大極之象、号兼中至者、兼者過去之天地人、乃至万物相兼而空尽之謂也、至者空而至極之儀也、尽至極故、臣之道十八分也、

⊕夫一易者、現在之劫肇也、円相中之二爻者、大極含藏陽陰之象也、一易之二



字、一者万数之始也、易者着レ眼看、日月
 不分之象也、天地未分之処也、日者一、
 月者一也、以此一易之象、号ニ正中來一
 者、於ニ易中一以レ正為ニ大人之道、以レ偏為ニ
 少人道、正者正直、偏者頗也、正直者無レ
 私尊道也、偏頗者有レ私、卑道也、亦以レ
 來為ニ君道、以レ去為ニ臣之道、何為君者位
 高故來、化ニ少人、々々者臣也、臣者位低、
 故、去見ニ大人、大人者君也、故正中者、
 君位也、來者欲趣ニ今時一氣也、無ニ來相一
 來也、未レ視レ臣処也、君道十分也、亦空
 劫与ニ今時ニ之中位、故、不レ欠ニ上下、独尊
 之君也、亦分ニ破這一易ニ二儀為、是天地
 開闢也、天者父、地者母也、雖レ然天在ニ
 天位ニ不レ動、地在ニ地位ニ不レ動則、不レ能レ
 生レ人、然而天順旋而會レ地、乃作レノ
 也、ノ者、陽來居ニ陰位、故陽失位之少
 男也、二分陽一分陰之象也、
 ●是也、乃正中偏為ニ君視レ臣、却來也、
 亦地逆転而合レ天、乃作レノ也、ノ者陰往
 居ニ陽位、故陰失位之少女也、二分陰、一
 分陽之象也、
 ○是也、乃偏中正為ニ臣向レ君、向去也、

是謂^レ列^ス天地人三才、亦^タ於^テ這人之象帶^ニ方有一千五百二十三數、一千五百二十者少分之數^ナ、故^ニ、下略而謂^ニ万物^ニ也、此^レ万物者自一易^ニ始^テ亦^ス一易^ニ也、故^ニ偏中正之次^ニ列^ス正中来^ニ、一易亦^ス歸^ニ大極^ニ、故^ニ正中來之次^ニ列^ス兼中至^ニ、雖^レ然^ニ画^ニ至極^ニ故^ニ、非^ニ十成之一位^ニ、無極者不^レ盡不^レ極、自然之到^ニ、故名^ニ兼中到^ニ、為^ニ五位之最上^ニ、亦云、以^ニ正中偏^ニ、為^ニ初位^ニ者、以^ニ天地開闢^ニ也、月峯(花押)洞山五位配品之心得 兼中到之配品者、左右俱不^レ去不^レ來自然之妙到也、兼中至者左右之配品俱空^ニ盡之至極也、正中来者、右之配品者、自^ニ空劫^ニ欲^レ趣^ニ今時^ニ之最初也、左之配品者、自^ニ今時^ニ歸^ニ空劫^ニ最初也、分^ニ一易^ニ而為^ニ二儀^ニ則^レ者、右之配品者、皆陽之儀也、左之配品者皆陰之儀也、亦云、天地人乃至万物者寒暑正偏之推遷^ニ、生死流轉^ニ之凡夫界也、故^ニ、古人道^ニ、偏中有^レ正、正中偏流^ニ、落人間^ニ、千百年轉^ニ此^レ天地万物^ニ、歸^ニ一界^ニ、是為^ニ轉凡入聖^ニ、百千歷祖之大悟發明者、總而一易^ニ當^レ着也、故^ニ以^ニ正中來^ニ、為^ニ一界^ニ、雖^レ然^ニ、留^ニ此^レ一界^ニ者、墮^ニ在^ニ解脫塵垢^ニ也、極^ニ一易^ニ大極^ニ者一亦空^ニ、極^ニ一界^ニ於兼中至^ニ者、乃無^ニ一魔界^ニ也、是謂^ニ悟了同未悟^ニ、亦謂^ニ未後行履^ニ也、此上之無極兼中到者、非^ニ極^ニ至位^ニ、不^レ出^ニ不^レ入而自然到也、以^ニ自然到人^ニ、名^ニ大魔^ニ、或^ハ眉間有^レ眼、胸間有^レ口、或^ハ頭長三尺、頸知二寸者、皆是^ニ述^ニ大魔之異相^ニ之謂也、

于時寬永十六己卯年五月廿七日

(小田原市香林寺所藏)

洞山五位

(三宝印) 偏中正^ニ、正中偏^ニ、□云、偏中偏ヲ一句ニ手ヲ入レヨ、学代、三世諸仏不^レ知^レ有^レ、狸奴白牯還^レ知^レ有^レ、心得ハ、偏中正、正中偏心得タワ悪イ、中ハ当^レト読ンダ呈ニ、偏ト中レバ正、正ト中レバ偏タ、正ノ裡ヲガ偏、偏ノ裡ヲガ正ダ、扱テ社偏中正、正中偏、一句ニシテ二ツワ無イゾ、句モ三世諸仏ワ五十二位ヲ経尽而入タ呈ニ、偏位下低イゾ、狸奴——ト云ハ尽サヌ其儘ノ位ダ呈、正位デ高イゾ、尽不尽、偏正ワ入り交ツテ一位ダゾ、夫レニ依テ偏中正、正中偏、一句ニ云イ走ゾ、正中來、於一句云、学代、霜眉雪鬢、火中出堂、々終^ニ不^レ隨^ニ今時^ニ心得ハ、正ト云ワ本位ノ^レダ、正ノ中ノ偏ト云ハ、本位□□度爰エ出タガ、今出タト見レバ、來相ハ無イ、句モ霜□□出ト云ハ、向上本位ノ資□□ビレヌ、形チ□□中ト云ハ、今時ノ^レダ、アレ共金火中エ出タト見レバ十分デワ無イ呈ニ、終ニ今時ニワ不^レ墮^ニ又^ニダゾ、如來休ト云モ向^レデヲリヤルゾ、是ヲ洞上デ活句トモ空劫ノ一機ノ点処共云タゾ、当□□□ト云モ向ヨ、扱テ正中來ト云モ聞エ走ヌ矣、◎三此ノ図□□兼中至兼中到、於一句云、学代、夜□□不^レ墮、偏正方□□師云、其句之修行ワ、代、夜明——主サエ□□、況ヤ□□心得ハ、總別洞上デハ外ト云ガ高イゾ、爰デハ兼中至与^レ到、節角云テ走ゾ、簾外ノ主サエ偏正ノ方ニハ墮セヌニ、況ンヤト云処デ、猶云、向上極則ノ主ハ響イタヨ、至ト云□□修行ノ尽シ派□□偏正黑白理道具□□ツニ打成タ処ダ、爰ヲ大功成就ノ地共云タゾ、況ヤト云

「兼中到極則ノ一位ハ聞エタヲ、扱テ云イコノ在ルハ至ノ一位ダ、扱テ到ノ」イコハ無イゾ、更ニ弁処無イ一位ヨ、爰ヲ無功天然ノ位イ共□ダ、無極大極ト云沙汰在リ、

于時元和三丁歲夷則自恣之日

前永平大安山主隆谷紹叟（花押）

（三宝印）（三宝印）（印）（印）

附与龍雪笑翁形見

（埼玉県正龍寺所蔵）

また、日本曹洞宗における五位説の依用は、峨山韶碩の頃より本格化することはすでに指摘したが、その契機となったのが法灯派の恭翁運良（一二六七〜一三四一）への参学で、ここで公案禅における自己・智不到・那邊の三段階の境涯の進展を極めることを会得したとされ、これが峨山に関する「不識上之一句」という機縁で、すでに前稿においてその話頭が切紙として定立し伝授されていたことは指摘しておいた。そしてさらにこの機縁は、峨山の五位説に対するより深い宗旨への参入の機縁ともなったというのが切紙伝承の立場であり、これをまとめて示したものが「峨山大和尚五位之図并法語」で、石川県永光寺所蔵、慶長十八年（一六一三）東奕より婁良へ伝授された例を掲げておく。

（端裏） 五位之図
同 法語

峨山大和尚五位之図并法語

（三宝印）

八 卦 正中偏 影裡視桂枝、天共白雲、明水、和明月一流、正中偏内紹也、正中不混、

四 象 偏中正 白雲無雨、裏秋山、明月透水流、不随、波心不波底月、

二 儀 正中来 鳥鳴無影樹、花開不萌枝、火裡生蓮、不帶靈香、当機不回互、覲面無前後、中不居正、

大 大 兼中至 瑠璃殿上無知識、土曠人稀相逢者少、中字是大極、成三転処少、

極 兼中到 德雲比丘未降、如峰頂覆千山、孤峰為甚、麼不白、一路隔己靈、

前三位中眼也、後二位兼眼也、重明重大極也、兼中到也、中字也、兼中至也、兼字一氣也、一氣大極転点処、不識上一句云也、世尊三昧世尊不レ知、は無師智也、那人通処也、那人不レ収、功不レ収也、用見悪也、此無師智不識上一句云也、万

物非^ズ那人^ニ、那人^テ還成^ニ六和^ト也、想澄^ト成^ニ国土^ト也、知覺^チ乃衆^ト生^ト成^ト也、不識^レ上得^所機緣、朝日光薄垣^ノ影碎^リ、移^ニ椽上^ニ一見^テ、豁然^ト大悟、瑩山和尚呈^ニ所解^ヲ、山云、我於^レ此不^レ然、可^レ參^ズ運良^ニ、師上落^ノ運良和尚呈^ニ所解^ヲ、良破^ニ却一紙^ヲ云、向^ニ此時節^ニ如何、師云、親疎也、良深証^ニ明^ス之、此不^レ識上一句、一氣大極点^ニ也、亦不^レ知我外神通^ノ、不識上一句云也、是云、世尊三昧不^レ知^ニ世尊^ニ、迦葉三昧不^レ知^ニ迦葉^ニ、亦不^レ知^ニ花開時節^ニ、一氣点^ニ大極^ニ也、全无^レ二、故云^ニ不識上一句^ニ、亦那^ニ邊至極^ニ不知^レ不覺也、不識也、此不識上一句、那^ニ邊不^レ留也、古今^ニ了知^レ人稀也、此心一氣大極点^ニ也、不識上一句、那^ニ邊一重上^ニ一氣也、押野明菴主不識上下語云、野馬陰裡走、亦師下語云、鬼箭風前落、亦金雞報曉^ノ、天未^レ明、亦樹体不識也、花開一句也、無師智也、那人道也、亦想^ニ成^ニ国土^ニ、智覺乃衆生成^ト、亦依^ニ那^ニ邊^ニ不^レ住^ニ、不^レ守^ニ閑田地^ニ、亦至道無難、荷葉円理也、荷葉円不^レ知、故纒有^ニ三言語^ニ、是揀^レ択、是明白、法語了、

于時慶長十八年三月吉日 東奕（花押）

附与嬖良禅伯

この五位説を、さらに日本中世において流行した陰陽道や、日本の道歌の伝統を取り入れて解釈しようと試みた例として、永光寺所蔵の「五位説切紙（仮題）」を掲げておく。この切紙の書写年代は、他の筆蹟との比較から、およそ慶長期頃と推定される。

〔五位説切紙〕

- 誕生王子

正	中	偏	立	命	罰	形	德	乙	甲	大	安	日ハヨシ
二分	コク	一分	白	ク								大勢日
												我佩ノ日
 - 朝生王子

偏	中	正	德	立	命	罰	形	丁	丙	立	怨	此日ハワルシ
二分	白	一分	黒	ク								不可
 - 末生王子

正	中	来	形	德	立	命	罰	己	戊	即	吉	此日ハよし
												使べし
 - 化生王子

兼	中	至	罰	形	德	立	命	辛	庚	赤	口	此日ヲ
												不可使
 - 内生王子

兼	中	到	命	罰	形	德	立	壬	勝	吉	此日ハ吉
											万ニカツ日
 - ⊕ 五位図染子共、自色ナレバ、烏黒鷲ハ白シ、同図引ク、ヨク聞ケバからすの鳴も法の声江、呵ハ本ン法性、か々ハ不可得、
 - ⊖ 同図云、夜ノ夜ニ鳴ヌからすの声聞バ、生レヌ先キノ親ゾ恋キ、
- 五位、七位ヲ、別処多シ、可有之也、二ツ図用処有ルノへ、内レ胎五位、廿五位、五十二位ヲ経過して可知事也、偏正中来図云、降リツモル雪ニ朝日ヲ置添て□くも風さむき哉、兼中至図云、雪モ晴ルム時ハ月日モ百ヲアラワレニケル哉、兼中到図云、秋風ハ花梢ニヲトヅレテ卯月半□□□コソスレ、閨ノ夜ニ烏スノ鳴キハ自ラ、アラワレモセズ蔵レモセズ、

空 くうをもてくうニ物□□□□只とち□□す、またもとのくう、

風 かぜ吹ば心のちりを払らわせよ、はらいてのちハまたもとのかせ、

火 火より日ノ出ハかたちたへもなく、きへてののちハまたもとの火与、

水 水忘し氷りとなりてかたまれと、とくればとくるまたもとのみつ、

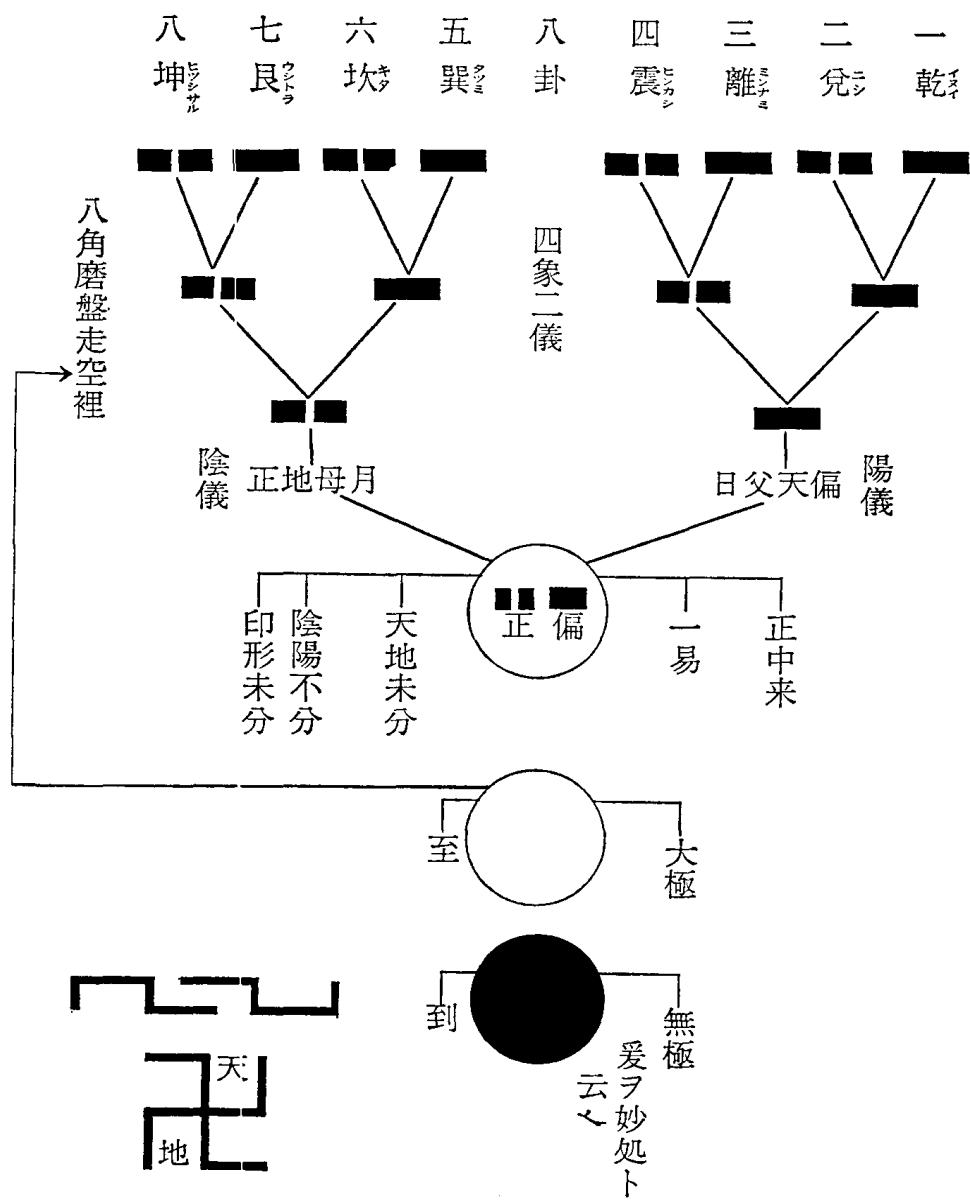
地 土モ生出たるものハみな、やぶれてのちハまた本のつち、

可レ秘々々

偏正五位説の各位は極めて象徴的な意味を有しており、その五位頌などの難解なものゝ解釈にあたって依用されたのが中国伝統の易の卦の説であり、洞山にはまた曹洞の宗旨を詩にした『宝鏡三昧歌』があつて、その中に「重離六爻、偏正四互、疊而為三、変尽為五」という句があることかう、易の説を依用した解釈も行われるようになった。次に紹介する「八角磨盤空裡走」は、自在な働きをなす磨盤の変化を、易の八卦の変化に当てはめ、さらに五位として展開する宗旨をこれに比定し

て宗旨理解の一助としたもので、永光寺所蔵の慶長期のもの、香林寺所蔵の寛永十三年（一六三六）書写のものゝ二種を掲げる。

（端裏）八角磨盤



私云、八角者無極ノ処ヨリ大極ト露ル也、磨盤者妙処、此妙
 処ハ、兼中到ノ処ヨリ偏中正中偏正中来ト露タゾ、扱露様ハ
 何ント、桃紅李白ト、此空裏走タゾ、磨ハ上ウス、盤ハ下ウス
 也、茶盤ト云者、目ヲ八ツニ切テ其一ツヲ八家ニ切テ、八々六
 十四卦ニ合スル也、亦磨盤者無極、空裏者大極走ト云ゾ、頭々
 物々ニ走タゾ、磨盤ト云ハ茶磨ノ支、茶磨モ、男磨計有テモ
 女磨ガ無レバ片落ルゾ、空ノ闇ニ合羊ハ、兼中至ハ○是也、是
 ヲ母ニ取ルゾ、兼中到●是也、是ヲ父ニ取ル也、此二ツヲ和合
 スレバ、正中来○是、是ヨリ一易二儀四象八卦六十四卦分空
 裏走タゾ、亦西来意カ答話ノ時モ、到ノ一位ノ処ハ西帰シ、陰
 極ツテ未_レ發_レ光処也、爰ガ活祖ノ居処也、陰陽和合スル処デ、
 来意ト第二儀門ニ下ツテ空裏ニ走タゾ、爰ヲ合テ西来意ノ答話
 ニスル、祖師_ノ西来意、五宗ハ、眼耳鼻舌身ノ五ツニノ意カ出ヌ
 処也、畢竟古来不_レ口活祖ノ支也、亦地水火風空ノ五ツニモ取
 ル也、此モ一子ヲ以テ古人ノ下語拳話共ヲミバ可ナラン、妙朝
 侍者ニ宗正問、如何是教外別伝、者云、八角——走、
 古語、八角——走、金毛獅子遂成_レ狗

(永光寺所藏)

(端裏) 八角磨盤
 八角磨盤空裡走

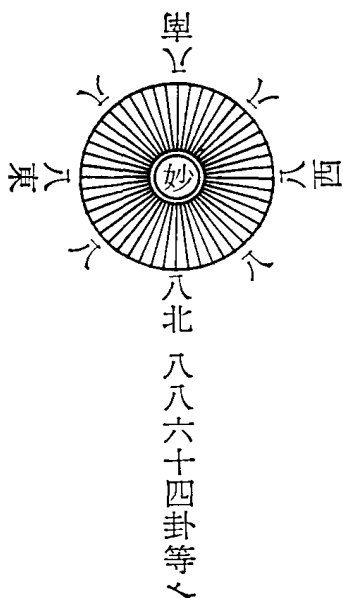
秋土用

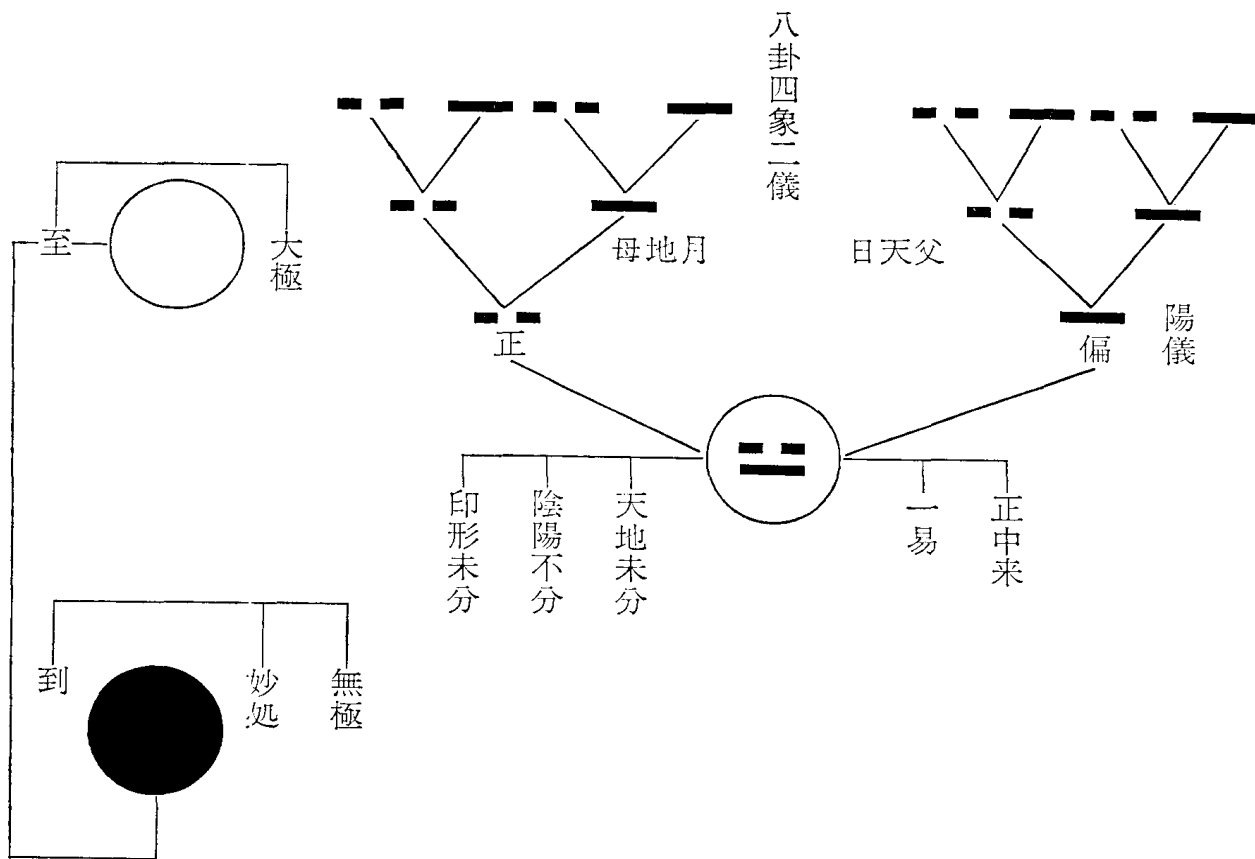
一乾天戌
 亥

中世曹洞宗切紙の分類試論(十九)(石川)

- 二 泥金庚
- 兌金辛
- 偏中正
- 三 離火丙
- 四 震木甲
- 春土用
- 五 巽風木巳
- 正中偏
- 六 坎水壬
- 七 艮山丑
- 夏土用
- 八 坤土申
- 戊己

磨盤図是
 諸話根源





四象ハ東西南北、八卦トハ四ノ角ミラガエテハ八方八角、無極ノ処ヨリ大樹ト□ハン、爰ヨリ正中來ト第二義門ニ下テ、真空ニ□ハ、偏中正●此、正中偏●此ニヲ合スレバ八角ノ磨盤、妙処黒処、無極、●此、爰ニ有テハ為ニナラレヌ呈ニ、下テ為ニナル、ト云テ□リ羊ハ何ニト、桃紅李白ト紅露レ□ル、○兼中至、是ヲ火ニ取ル、上ハ磨、兼中到●是ヲ妙ニ取ル、下ノ磨ヲ打合スレバ正中來、○是、言ヨリ一易ニ義四象八卦ト出デタ、六十四卦ニ合スル、亦西來意ノ答話ノ時キモ、陰極テ氣未レ発、到ノ一位ヨリ西來ト第二義門ニ來テ為ニナル、意ト云ハ肝要、西來意ト彼ヨリナケレバ、○此レ□卦、由來大極、●此、一易ハ是、大極一易ニ義四象八卦、大極ハ氣ヲ不レ見、一易ハ混頓未分ノ田地、二義ハ天地、四象ハ四方、八卦八方、方トハ東西南北ノ四ノ角ヲソヘテ、十方ハ乾坤ノ二ツヲソエテ、混頓未分トハ如ニ鶏却、大極ノ一点成ニ混頓、雖レ有ニ日月、而輪ニ日月不ニ相離、故ニ名ニ一易、陰陽未レ分故ニ名ニ未分、田地、未分ノ田地トハ母胎ノト、亦八卦トハ離中断ニ此、坤皆断ニ此、是、兌上断ニ此、乾皆連ニ是、坎中連ニ此、艮上連ニ是、震下連ニ此、巽下断ニ是、八卦ノ方ハ、離南、坤ハ未、兌西、乾ハ戌、坎ハ北、艮ハ寅、震ハ東、巽ハ辰巳方、木火土金水、々ハ生レ火、火ハ生レ土、々ハ生レ金、々ハ生レ水、天地開闢ノ時、火先生、木ノ徳東ニ有、日月星辰モ東方ヨリ生、故ニ木火土金水ト云、火ノ徳南方ニ有リ、始ル、其義大極已前、亦重離

ハ六爻偏正回互、疊ンデ成レ三、変尽ノ成レ五、重離者三三是、離中斷ノ卦ノ重ハ故ニ六爻、偏ノ卦ハ一是、把ニ離中ニ爻、上下ニ加テ成ニ中孚、中孚ノ卦者三三是、中孚ノ二爻ヲ取テ上下ニ加テ成ニ重離、如是偏正回互ノ不立ニ重離重孚大過三卦、故云、疊ニ三為レ三、大過ノ卦相分テ為ニ三卦、則、成ニ巽兌二卦、故ニ巽下斷ニ兌上斷ニ是、上ノ重離ノ中孚大事一ノ三卦ニ加ニ巽兌ノ二卦、則五爻ナル故ニ、変尽テ為レ五、是乃五位ノ卦、亦五百ノ塵点阿僧儀劫トハ万萬為ニ一依、依々為ニ那由佗、那由陀為ニ五百塵点劫、語云、阿僧祇劫、此ニハ無數劫、亦經中說云、譬如五百塵点那由佗阿僧祇三千大千世界、抹為ニ微塵、悉以為墨、向レ東千国土上ニ一点、悉以点尽、為ニ五百塵点劫、亦君臣トハ、君ハ空、臣ハ色、是ニ依テ名レ空為レ君、名レ色為レ臣、隨時点變スル故ニ名レ色為レ臣、暗明トハ、明ハ色、暗ハ空、賓主トハ、賓ハ色、主ハ空、夫レニ依テ名レ色為レ賓、名レ空為レ主、去来有ル故ニ賓ヲ色ト名ク、無ニ去来ニ故ニ、名レ空為主、亦父子ハ、父ハ空、子ハ色、清相空ヨリ生故ニ、名レ空為レ父、亦黑白トハ、空ハ黒、白ハ色、黒ハ夜半以ニ清色相、故名レ空、為レ黒、白ハ有ニ清色相、故ニ名レ色為レ白、亦此□シ得テ後チ、不レ可レ輪回生死、因レ甚諸仏菩薩現ニ鳥類畜類形、或化ニ人天、或化ニ道俗男女、所作作業、只同凡夫畢、答云、若得道後一向道不レ可レ輪回、謂之外道斷見、所以道、生死二路一心妙用、有無ニ二法自性真得化、愚□厭ニ生死、聖賢求ニ生死、殊不レ知ニ聖賢生死与凡愚生死、遙ニ別、問、天地先天地父、天地後

天地母、天地先父、不レ疑、可レ謂、天地ハ子、先生母後生、於レ義不レ宜、如何弁明、答云、必母後不レ生、収ニ天地ニ故名為レ後、天地収尽、天地乃始、収処即天地後天、地乃先、所謂、先後一致、始終一貫、如ニ車輪轉無始無終、畢竟也、
寛永十三子初夏吉辰

附与□□納

（香林寺所藏）

五位説理解のための助けとなる説としては、易の援用がその中心であるが、他にも種々の説を利用してその難解な内容理解に資しようとした姿勢がうかがわれる。

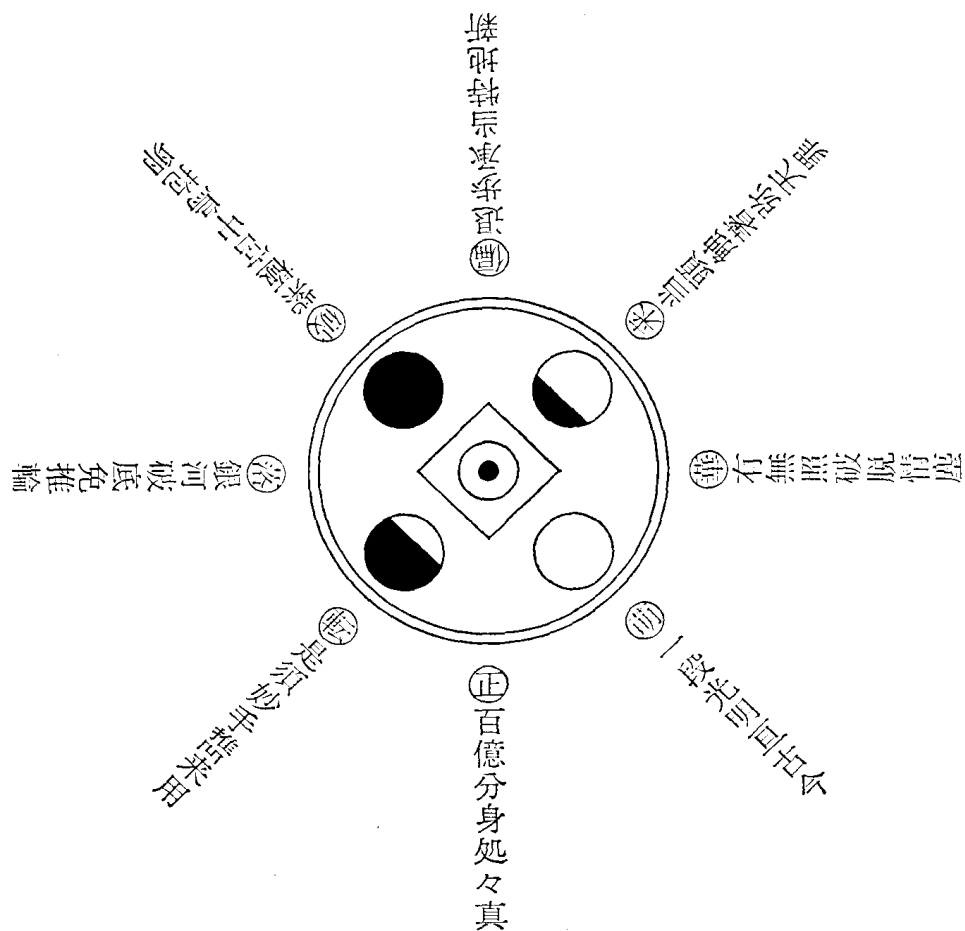
たとえば、中世には宋、明等より輸入して我国の貨幣経済を支えた宋銭、渡来銭の形状を用い、これにさまざまの意味を付加して五位説の理解に資しようとしたのが、「一文大光銭」「一文大広銭」という切紙である。これも、永光寺所蔵寛永十九年（一六四二）久外吞良再書のもの、香林寺所蔵、寛永十五年（一六三八）長円所伝のもの、及び三重県広泰寺所蔵、寛永十七年（一六四〇）英利所伝のものを紹介しておく。

（端裏）一文銭

一文大光銭図

雲門僧問、如何是曹洞宗、云、一文大光銭、

曹洞妙伝細密家問也、雲門大師以ニ一文銭曹洞五位分明有ニ答語也、先大光年号也、大光年中鑄銭也、有ニ銭表裡、



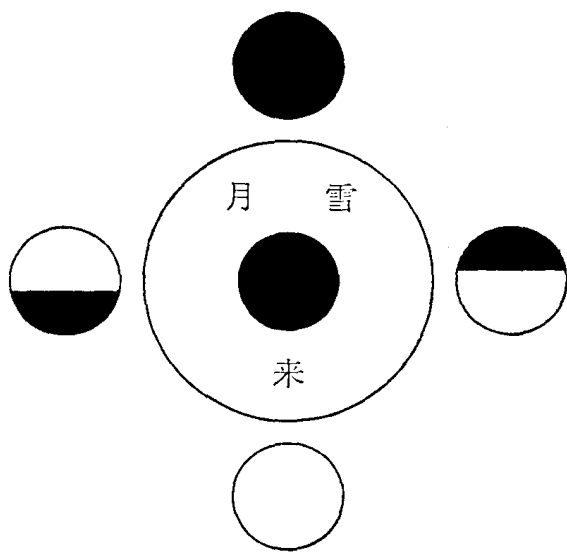
表、文彩也、錢四字偏位也、裡、無文、正位也、一文中百千萬億無量含妙也、曹山八圈兒、同五位、宏智八句、皆重々有妙密事、家門之一大事也。

●錢裡、陰也、正也、地也、○錢表、陽也、偏也、天也、中間穴、諸仏出身一路也、經中是云蓮華宝蓋也、重々無尽難ニ書画一也、

皆慶長十九年甲寅九月吉日 正伝畢
今寛永十九年 於洞谷山再書之者也

吞良(花押)
(永光寺所藏)

(端裏) 一文大広錢切紙



雲門僧問、如何是曹洞宗、師云、一文大広錢、私云、大光季中ニ鑄タル錢也、答話ワ五位ヲ建立スル家風ナ呈ニ、五位ニ合テ答也、裏ラワ紋綵無シ、正位、兼中到也、面ニ紋綵分明ナルワ兼中至也、中カノ穴ワ不墮ニ表裏、故正中來也、五位ノ内チ、前四位ワ皆ナ偏位也、今時也、兼中到一位ハ裡頭也、雖然沙汰スル則ンバ四位ワ皆ナ功処也、向上ノ

裏ハ不_レ干_ニ商量_ニ裡頭也、綿密ノ妙者、一文錢之上_ニ在_レ之、錢、上半分黒キワ、裏ヲヲ形_{アラス}義、正中偏ワ出派功也、偏中正ハ入派功也、畢竟真常一色也、亦誕生王子ノ位也、

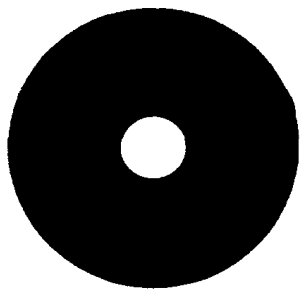
于時寛永十五_寅年極月吉辰

長円拝

(香林寺所蔵)

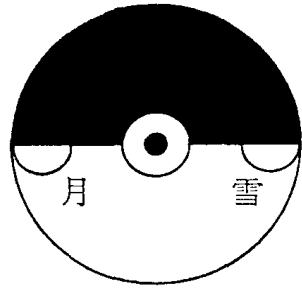
(端裏) 三位之図 五位之図

三位之図



五位図 丑中野

向去



正中偏

却来

小而白キ自己一色也、黒白_{両色混}中間_{共功也}、大功一色也、大黒_ハ即時向上_ク、私云、白ニモ付カズ黒ニモ付ヌゾ、時キが尽不尽、一枚也、不到ノ処也、

雲門僧問、如何是曹洞宗、師云、一文錢之大光錢、私云、大光年中_鑄錢_ク、一句五位ヲ建立スルノ宗風ヲ答ルナリ、裡文彩無ケレバ、正位兼中到也、表文彩分明ナルワ、偏中至、中ノ穴ハ不_レ墮_ニ表裡_ニ、故_ニ正中來_ニ、五位ノ内前ノ四位ワ皆ナ偏位、今時也、兼中到_{一位}ワ裡頭也、雖然沙汰スル則ンバ五位ワ皆功処ナリ、向上ノ裏トハ不_レ于_ニ商量_ニ裡頭也、綿密妙旨、一文錢ノ上_ニ在_之、錢ノ半分黒キハ形_ニ裡_ニ儀_也、正中偏ワ出派ノ共功ナリ、偏中正ハ入派ノ共功也、畢竟真常一色地、誕生天子ノ位也、

于時寛永十七_{庚辰}季二月吉日 花叟在判

海眼山主融山祝和尚、今伝附英利畢

(三重県広泰寺所蔵)

大光錢・大広錢のいずれも、実際には無い大光あるいは大広年中に鑄造された穴あき錢、通称「鵝眼錢」と呼ばれるものの、何も書いていない無地の裏を正位とし、文字の書いてある表を偏位と見立て、そこを通貫する穴にも正中來の意味を付与した、牽強付会ともいえる強引なこじつけであるが、五位説理解をなんとか理解させようとした中世洞門の諸師の努力の軌跡は読み取れる。また偏中正は「入派(修行から悟り

への段階)」、正中偏を「出派(さとり)の段階)」とする捉え方は、中世の功勳的公案禅体系の中での位置付けであった。

さらに大光銭の場合と同様に、中国における州・県・村という地方行政上の単位をモデルとして、これを正位、偏位とその相即の様相に見立て五位説を説明しようとするのが「三裏之図」である。永光寺所蔵、慶長十九年(一六四二)書写のものは、

(端裏) 三裏之図

三裏之図

(三宝印)



(三宝印)

●此圈児ヲ以テ見ル則バ、三位之裡底ノ旨分明ナルベシ、大黒ノ円相州裏ト心得ベシ、半白半黒ノ圈児ヲ県裏ト、白一色ノ圈児ハ村裡ト、此二ツワ大黒円相内ニアリ、県裏ハ中間ノ共功当門ノ位ト、故黒白相兼ヌルト、村裡ハ白一色ニノ今時ト、頭裡

ハ広大ニノ返表ナシ、外頭ハ狭小

●州裏ヲ仏性空ト云也、名之号ニ空劫已前、云ニ那時、云ニ正位、

云ニ実源、云ニ大道、云ニ一□已前之妙、云ニ兼中到、云ニ露柱当頭、

云ニ向上一窮、云ニ本有田地、云ニ大覚一位一タゾ、

●県裏、世間空ナリ、名之為ニ中間、然バ共功真常一色ニノ、

正中偏、々中正ハ此位ニ在リ、出入ニヨツテ兩位トナス、兼中至ハ共ニ此位ニ云々、此一位置ヲ將軍位、誕生王子、銀、蔵八織田ト云々、此一位置ハ、内外ヲ兼ヌル故ニ、入ル則ンバ裡頭、出ヅル則ンバ外頭也、一塵入レ正受ト云モ此一位置也、爰ヲ坐禅ノ境界ト云々、故ニ三昧ト号スルト、

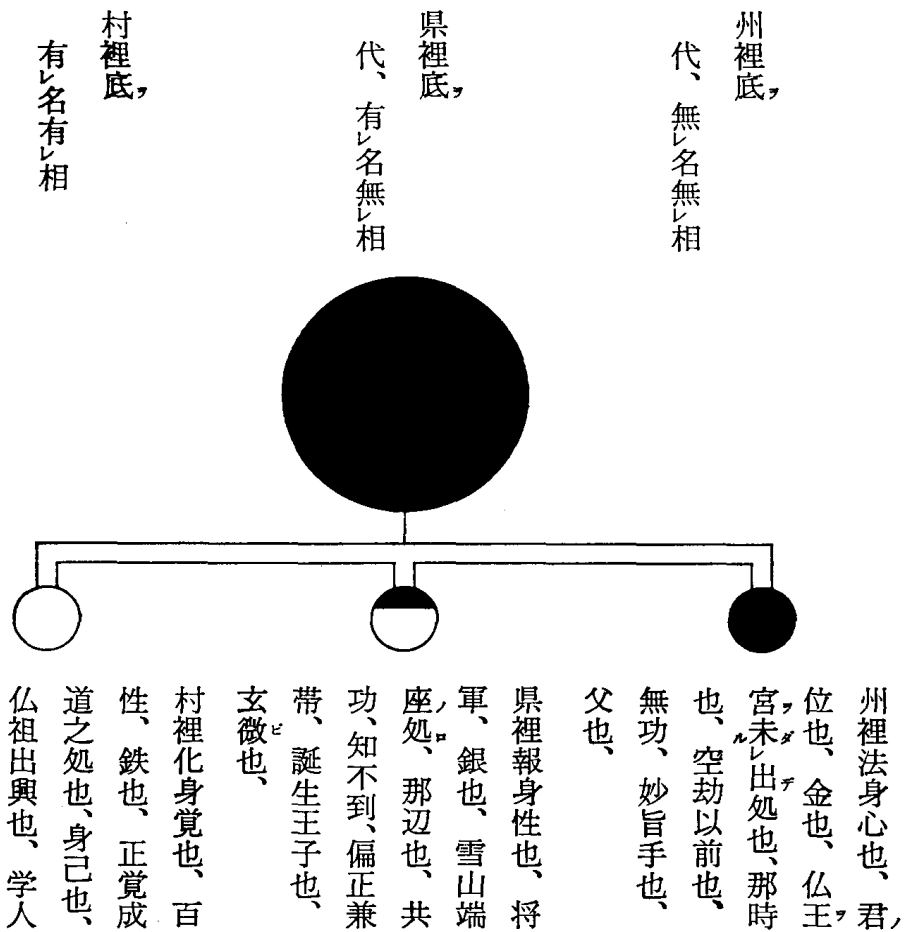
●村裡ワ、色相ト、今時大陽門下也、故ニ明白ト、此ヲ偏位ト云イ、這辺ト云イ、功処ト云々、三裡底一句ニ薦得スル時ンバ、不レ得レ取、不レ得レ捨、方可ニ兼中図、此三裡底ヲ刻デ心得無バ、担板ノ漢子ナルベシ、此図、私通ニ車馬ニ儀也、他見有問敷者ト、他許シ流転セバ、法爵道可□者ト、

于時慶長十九寅六月吉日

というものであり、州裏が兼中到、県裏が正中偏・偏中正の二位、村裡が兼中至に想定されているといえよう。

次のやはり永光寺所蔵で、前者と同時期の「三裡之図」も、同じく州・県・村の行政単位を素材にして、正偏五位を理解せしめようとしたものであるが、さらに三身説、君臣五位、王子五位、門参の三段階(金・銀・鉄)も併せ想定されることになった。

(端裏) 三裡之図



有テ頭ル主デ走、師云、何トテ、千百億化身仏デ走、

この切紙では、「本文」と「図」、それに「参」の、切紙の三要素がすべて一紙に含まれている。

この外に、「上来」という禅の語録にしばしば用いられる語を、上—正、来—偏と当てはめて、「曹洞宗秘密大事」とした、永光寺所蔵の「上来之図」という切紙もあるので併せ掲げておく。なおこれには「参禅」が付随している。

(端裏) 上来之図

上来図

先賢玉泉和尚、以ニ上来ニ字ヲ截レ釘抽レ概、或時、為主、為賓、或時、出ニ離迷悟生死、五位君臣総有ニ此中、自由不底活手有ニ此中、

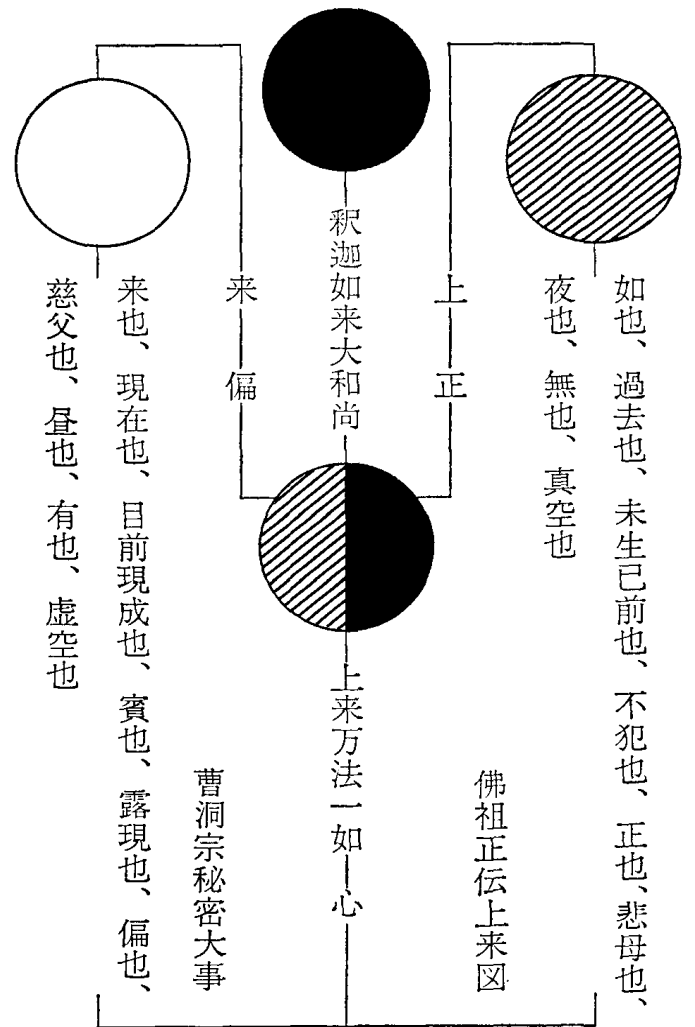
上来一般子孫後昆覆隠也、

(此処に次頁の図あり)

師示云、上ヲ、学拳ニ拳頭、師云、来ヲ、拳両手分開、師云、上来ヲ一般拳、作ニ一円相、師云、畢竟、即礼三拜、

寛永八辛未歳九月吉日 於洞谷重書之畢、

久外嬖良(花押)

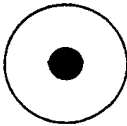

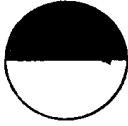


以上で偏正五位に関する基本的な切紙の紹介は尽されているが、五位説には、さらに、曹山本寂が創説した、君と臣下との関係を用いて偏正五位説を説明しようとする「君臣五位説」と、臨済宗の石霜慶諸(八〇七〜八八)が創唱した、天子の王子が生まれて帝位に就くまでの五段階を譬喩として、修行者の見性の導きとした「王子五位説」があり、特に君臣五位は偏正五位と併行して用いられ、その種の切紙も多いのでここに一括して紹介しておく。内容は、五位と君臣の関係を一覧にして簡単なコメントを付した、府中市高安寺所蔵、貞享五年(一六八八)九世大器保禅(一七一二)伝受の「五位

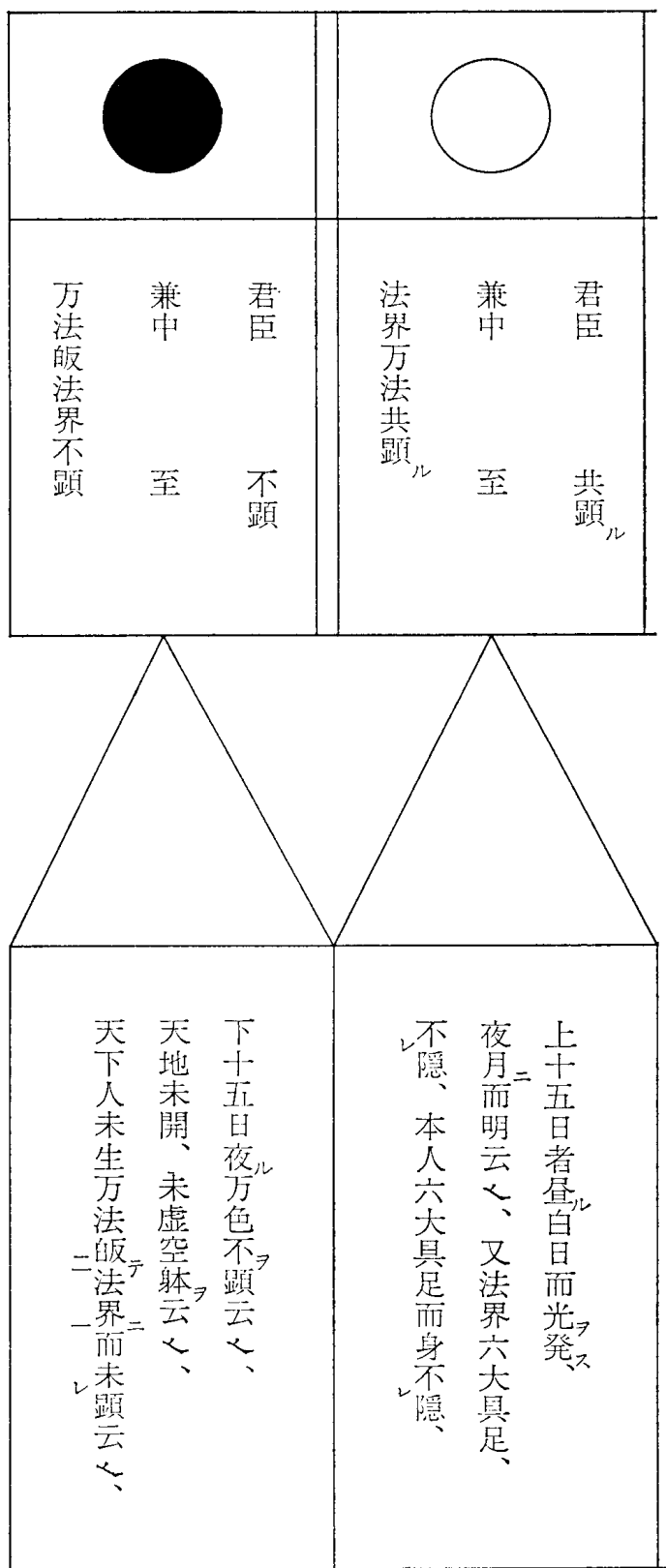
君臣秘伝一紙」、易の重離六爻説を中心とした、永光寺所蔵、元和五年(一六一九)久外嫫良伝受の「五位君臣図」、これとはほぼ同内容の、三重県広泰寺所蔵、寛永十七年(一六四〇)、英利所伝の「五位君臣図」、及び這辺・那辺という禅語を、やはり偏位・正位を示す語として措定し、これについて参話の形式で注した、永光寺所蔵、久外呑良所伝の「這那之参」も、内容的には君臣五位等の援用による五位説理解を示すものなので、以上四種を掲げておく。

五位君臣秘伝一紙

曹洞之骨髓一大事也

		
<p>自法界来</p> <p>正中</p> <p>自君来</p> <p>来</p>	<p>五色</p> <p>万法</p> <p>偏中</p> <p>臣カ</p> <p>昼カ</p> <p>法界五人</p> <p>法界</p> <p>正</p> <p>君</p> <p>夜</p>	<p>法界</p> <p>法界</p> <p>正中</p> <p>君カ</p> <p>夜カ</p> <p>五人</p> <p>五色</p> <p>法界</p> <p>偏</p> <p>臣</p> <p>昼</p>

<p>夜之漸欲明節云々、</p> <p>法界天下人与成始曰々、</p> <p>五禅和合而人之形作始々、</p>	<p>昼成夜、偏中正云々、</p> <p>天下人四大分離而皈法界云々、</p> <p>五色皈五大曰々、</p>	<p>夜成昼、正中偏云々、</p> <p>亦法界々、天下人成云々、</p> <p>亦法界、夜、偏中正云々、</p>
---------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------



正者 虚空ニ 偏者 万法ニ
 君者 虚空ニ 臣者 万法ニ
 正者 夜ニ 偏者 昼ニ
 正者 法界ニ 偏者 万法ニ

◎ 私云、此於宗云ニ、活祖ニ、活仏ニ、不断命脈ニ、日月星
 就レ之、須弥廻ル、四時還變モ此宗万木万草竹連ニ而出ル、向

（府中市高安寺所藏）

(端裏) 五位君臣図

五位君臣之図

重離六爻偏正回互、疊而為三、變尽成五、易註曰、離列
汜反、離麗著也、著明也、明日月麗テ天重時之易也、大極顯時
一易也、横画豎点六爻、



離中斷
正中来

数第二第三爻別疊成一卦

偏中正

数第四第五爻別疊成一卦

正中偏

数中三ニ爻別疊成一卦

兼中到

巴窮則變、々則通、所謂變尽成五是也、奇陽数偶陰数、奇
添(奇脱カ)偶添偶、中的句忘五位一位、如件、

于時元和五年六月吉日

東察(花押)

(印)(印)

附与嬭良禪翁

(石川県永光寺所蔵)

(端裏) 五位君臣図

五位君臣図

重離六爻偏正回互、疊而為三變尽為五、

易注云、離列有也、離麗也、麗著也、明月、明日月麗于天重
時易也、大極顯時一界也、横画豎点六爻也、

中世曹洞宗切紙の分類試論(十九)(石川)



離中斷
(三寶印)
正中来

数第二第三爻別疊成一卦

偏中正

又数第四第五爻別疊成一卦

正中偏

又数中之二爻別疊成一卦

兼中至

奇陽数偶陰数奇、添奇偶添偶、

中的忽勿忘、五位一位、

寛永十七季三月吉日

金龍山海眼院住持融山叟

(印)(印)

今附与英利畢

(三重県広泰寺所蔵)

(端裏) 這那之參

(三寶印) 這那ノ二字ヲ云エ、学云、天地ノ先ニ先タルガ那
走、這ヲ、学云、天地ノ後ノ後タル父ガ這デ走、師云、二字ヲ
一位ニ云エ、学云、合面睡著、師云、其ニ根本ノサタワ有・マ
ジイガ、何トテ根本トハ云タゾ、学云、此時陰陽ガ和合シテ阿
浮曇ヨリ体ヲ得、伽羅藍ヨリ形ヲ得テ走、師云、恁麼時如何、学
云、総在レ此中ニ円、師云、円ナルワ何物ゾ、学云、良久、師云、
何タル時節今時エワ出タゾ、学云、両手展開、師云、恁麼時如
何、学云、打筋斗出去、師云、著語ヲ、学云、両脚踏レ天、師
云、ソコデワ何分タゾ、学云、未分デ走、師云、未分処ヨリ何

ト分タゾ、学云、地水火風空ト分テ走、師云、証拋ヲ、学云、
 眼耳鼻舌心意ト六識ヲ持シテ走、師云、句ヲ、学云、眼横鼻直
 誰無分、師云、受用シ羊ヲ、学、眼ニワ●受用走、師云、句ヲ、
 出遊三昧門、師云、耳ニハ何受用ゾ、学云、●ト受用シテ走、
 師云、句ヲ、入徹幽玄底、師云、鼻ニワ何受用シタゾ、学云、
 ○ト受用シテ走、師云、何トテ、学、○相ナス、師云、句ヲ、
 学、突出難レ弁、師云、恁麼時如何、学云、自有馨香一滿天地、
 師云、舌、何受用シタゾ、学云、●ト受用ノ走、師云、什麼ト
 テ物ヲ名付出スカ、学云、心花ヲ働走、師云、何トテ名付タゾ、
 学云、柳緑花紅、師云、身ト意ト二ツハ何ト受用シタゾ、学云、
 ●ト受用ノ走、師云、何トテ、学云、君臣合道テ走、師云、承
 当ヲ、学云、師ヲツム、師云、畢竟ヲ、学云、祖仏凡夫不相犯、
 長松万戸鶴眠深、師云、五躰ヲ得テノ畢竟ヲ、学云、陰陽矢ニ
 当テ走、師云、句ヲ、学云、公道世間只白髮、貴人頭上曾不饒、
 師云、其句ヲ説破セヨ、学云、只死迄テ走ヨ、以上卅位、

(石川県永光寺所蔵)

最後に、中国洞山下門流の五位説理解を示す例として、大
 陽警玄(九四二、一〇二七)の五位頌に注を加え切紙として伝
 えた、府中市高安寺所蔵、貞享五年(一六八八)大器保禅伝受
 の「大陽警玄和尚五位総頌」、及び、宋代における大慧宗杲
 と並ぶ禅界の双壁とされる宏智正覚(一〇九一〜一一五七)が
 四つの依り所(借)を設けて学人を指導した「宏智四借」

を、さらに偏正五位説に配当して参を付した永光寺所蔵の
 「宏智四借」を、この分類項目における切紙紹介のしめくく
 りとして掲げておく。

(端裏) 沙門九拜

大陽警玄和尚五位総頌

無中有路、透長安劫外、灵枝攀敢、攀玉殿、苔生尊貴甚、三更紅
 日黒漫々、拶云、三更句脈意脈、在甚麼処、三更一句五位頌シ
 頭シ頌終、註云、頭終一句、五位全位也、天曉位日出卯、日中
 午日酉、一向揚々、一向白々、一向三々、正中俺一向三更白漫
 々ト變化ス、

天曉白漫々、地収黒漫々、天地昼夜行從劫至劫如是々々、此
 二位正中偏、偏中正是也、正中來中土ヨリ始テ、離來坎來ス、
 離ニ來ル則、三更白漫々、坎來則三更黒漫々、黒白一中正中□
 極、

兼中至乾三連三更白漫々、兼中到坤六断、三更黒漫々、五位如是
 歟、参、又云、三更中也、一字注却々、頌古々、中、一字即五位也、
 ●中正中偏三更白漫々變化、是即正中偏、

●中偏中正紅風黒漫々ト變化、是即偏中正、
 ●中堅之中横之中、横之中極、是即兼中到、中之一字位如是也、
 参、

△無位、中無位、中当、アタル、

△正位、正中偏、三位々、正中三位、一位々、中一位、

△五位畢竟如何、曹山五位、天下太平、皇道五位、天下大平、

龍沢先師作、

于時貞享五年^{戊辰}三月吉辰 普岩叟(花押)

於海禪室中 附与 保禅僧

(府中市高安寺所蔵)

(端裏) 宏智四借

宏智四借

借功明位ルヲ、二儀四像八卦ト分テ己前ヲ犯シ走ヌ、偏中正也

借位明功ルヲ、犯サズシテ二儀四象八卦ト分テ走、正中偏也●、

借々不借々ヲ、空劫己前更己前、又只今時不離日用、師云、其

句ノ説破ヲ空劫己前更己前トカシカリ、又只今時不離日用

トカシカツテ走、兼中至^レ○、正中來ハ此ニ合スル^レ、

全超不借々ヲ、卦盤卷却、学亦只皈此地則兼中到^レ●、大源派

受桃和尚、透ノ参タスルトキ、不点道云ツテ四借ヲ云ウン後

五位ヲ云^レ、サウシテ五大老、其后五戒ノ参ヲスル^レ、

四借天童頌古

蘋末風休夜還半ヲ、トツクト睡テ鼻イキノ卒共セヌガ二ツ夜半

テ走、師云、水天虚碧共秋光、学、己前ノ如クニ坐シテ、コ

ムガ水天——光テ走、師云、月船不犯東西岸ヲ、云、マツ此

カ一色無弁ノ功処テ走、須信以高人用意言ヲ、学云、此境界

窮限ハ走ヌ、師云、借功明位ヲ、云、有語中無語テ走、

中世曹洞宗切紙の分類試論(十九)(石川)

六戸吳通路不迷ヲ、云、六門通^ニ曉意^ニテ走、大陽影裡不^レ当^レ機

ヲ、出タガ全ク今時ニワ出走ヌ、縦横妙転無私ノ化ヲ、云、

彼展^レテ走、恰々行^レ從鳥道皈ヲ、云、行ケバ共行、皈レハ共ニ

皈テ走、師云、借位明^レ功ヲ、無語中有語テ走、

(石川県永光寺所蔵)

七、おわりに

本稿の最初に設定した分類項目の順番からいえば第八番目の、「室内(宗旨・公案・口訣)」に関する切紙類の紹介も、前後四回にわたってしまった。特にこの項目は、内容的には門参類に入れてよい、分量的にも多くなるものを含んでいたために、長期の連載になってしまったわけであるが、切紙として伝授される参話と、冊子の形で伝授される参話とは、参の内容としてはともかく、話題の立て方などに極めて統一的な傾向があったことだけは確認できたようである。門参資料の整理もすでに若干初めており、これが全体像として比較可能になった場合は、よりその特徴が明らかになることと思われる。

切紙資料紹介の稿も二十回近くになるうとしており、これまで予定していた分量のほぼ三分の二ほどに達した。これからは分量的にはさほど多くないものばかりであるが、中世社

会史や文化史とも深く関わるものばかりなので、今後はなるべくコメントも豊富に盛り込んでいきたいと思っている。

注

- (20) 偏正五位説は洞山良价の創唱ではなく、曹山本寂の説によるもので、したがって雲居道膺の系統へと伝った思想でもないとする石井修道「曹山本寂の五位説の創唱をめぐって」(『宗学研究』第二十八号、一九八七年三月)がある。また道元禅と偏正五位説を内容的に通底し響き合うものとする新井勝龍「道元禅師と偏正五位」(『印度学仏教学研究』第三十九巻一号、一九九〇年二月)もある。
- (21) たとえば佐橋法竜「正偏五位説の研究」(『宗学研究』第一巻第一号、一九六六年三月)参照。
- (22) 拙稿「『義雲録』における『宏智録』引用の意義」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三十五号、一九七七年三月)参照。
- (32) 『洞上雲月録』三巻は、傑堂が『五位顯訣』を提唱したものに南英がさらに自己の見解を付したもので、南英には他に、『重離晷變訣』『五位図説詰難』『三易讎校故教語』『五位秘訣』等の著がある。
- (24) 新井勝龍「偏正五位説の源流」(『宗学研究』第十二号、一九七〇年三月)、同氏「大陽警玄禅師における中国曹洞宗旨復古の位置」(『宗学研究』第十三号、一九七一年三月)等参照。